（第三種郵便物認可）

マイウェイ my way

未知との遭遇

「未知との遭遇」と言えば、それは、（宇宙人との出会いのように）私達「人間」の常識を覆すような経験を指すが、異文化となる日本での日常生活も、私にとっては、十分にこのような出会いの連続になり得るものであった。けれども実は、自分の国での、変哲のない日常生活の中にも私達を驚かせる体験がある。私にとっての、このような体験の一つは、ある一匹の山羊との出会いであった。

南山大学学長 ミカエル・カルマノ 3

見上げた山羊と異文化生活

祖父経営の八百屋。店舗前の人物は筆者のめい

幼少の頃の私は、よく父方の祖父のところに遊びに行っていた。祖父は機械メーカーのエンジニアであったが、転勤させられそうになった時に会社を辞め、1930年代から八百屋を営むようになった。"Vorstadt"という地名から判断すれば、父の実家は元々、町の入り口付近にあったのだろうと思う。が、私の記憶にある、1950年代の初めごろには、その道路にはいろんな店が並んでいて、町の中心にある市場に通ずるメインストリートとなっていた。通路から祖父の店の中庭に入ると、向こう側には大きな納屋があり、その右側には囲いがあり、鶏が放し飼いになっていた。その納屋には、祖父が飼っていた、一匹の山羊がつないであった。

小さかった私は、怖がりながら山羊を見上げたのだが、その大きさにとても驚いたことを今でも覚えている。しかし、小さいときの記憶には落とし穴があるものである。私が10歳の時、カルマノ家は、当時の人口が1500名程の田舎村に引っ越した。ある日、その村の道路の脇につないであった山羊を見てまた私は驚いた。馬ぐらいのサイズで記憶していた山羊は、ずっと小さく、文字通り普通の山羊のサイズであったのである。

今でも時々考えてしまう。小さい時に自分の目で見たあの山羊はいったい何者であったのか、と。というのも、他の動物に関しては同じような経験は無かったからである。物事を相対的に―自分より大きい、自分より小さい、などと―認識することは我々人間の宿命かもしれない。しかし下手をすると、そのような現実離れした第一印象が、世界を見る尺度・観点となってしまう危険もある。だからこそ、同じものであってもそれを何回も注意深く見なければ理解できないのだ、という心構えが必要である。特に異文化での生活においては。